

武田泰淳研究

——父大島泰信の俳句——

長 田 真 紀

武田泰淳の父、大島泰信（明治七年三月二十四日——昭和二十七年三月十八日）は、能文家ではなかった。

大正大学教授として宗教学を講じ、『佛教讀本』一、二卷（明治四十年五月、九月）や、『浄土宗史』（大正三年一月『浄土宗全書』第二十卷に収載）の著作がある浄土宗の学僧であったが、「口下手の上に、文章を發表するのが何より嫌ひ」⁽¹⁾で、「葉書は一、二行で、電報みたい」⁽²⁾だったという。泰淳の母方の伯父で、名文家と称される渡邊海旭とは対照的である。

しかし、そんな泰信は句作を楽しんだ。また、家族や近親者が会した折りなど、しばしば気軽な句会を催した。そ

こには泰淳が加わることも多かったという。

さて、このたび、大島淑氏（武田泰淳の兄嫁・大島泰雄夫人）のご高配により、大島泰信の俳句手帳の一冊を閲覧させていただく機会を得た。未公開未発表のものである。

この手帳には、昭和十一年八月二日から昭和十八年七月六日まで断続的に詠まれた俳句七百三十二句（その他、短歌三首、漢詩一編）が書き記されている。

手帳は市販のもの（ヨコ12.5×タテ17.4cm）を使っている。

本稿では、この俳句手帳の中から、泰淳について詠まれたものをいくつか紹介したい。なお、仮名遣い、旧漢字の表記、句点の施し方等原文のままとした。

まずは昭和十二年のもの。

十月十五日

應召の首途の庭や菊香る
應召の別れの宴や菊の花

十月十六日

應召の首途の朝や秋の雨
出征の祝幟やしよほ濡れて
應召の子は勇み行く雨の中^秋
子等遠く大猫菊の山の菴

泰淳は昭和十二年十月から昭和十四年十月まで日中戦争に出征した。

竹内好は、昭和十二年十月十三日(水)の日記に、「朝、武田より架電。昨夜、召集状来りし由、驚く。」と記しているが、そうだとすると十月十二日に召集令状が来たことになる。

十月十五日の二句は、応召前日、家族で武運長久を祈つての宴を催したときの句であろう。泰信は菊の栽培を趣味にしており、丹誠した菊が出征する息子の門出を彩った。

翌十六日の四句は、泰淳応召当日のもの。「祝幟」、「勇み行く」と詠まねばならない泰信のころは痛々しい。

この日、竹内好は日記に、「雨。五時半、飯塚と共に武田を送りにゆく。」と記している。

また、さねとうけいしゅう(実藤恵秀)は、「武田さんが、輜重兵として出征するとき、われわれは中目黒のガスタンクのちかくに、おくりに行った。武田さんは、国民服をきて、町のひとに、かたのごとくあいさつした。われわれは、「祝出征武田泰淳君」という、小さなのぼりを、もちかえって、本郷三丁目の和紙店の何階かにあった中国文学研究会の事務所にかぎった。一種のおまもりとしてである。」と述べている。

次ぎは昭和十三年のもの四句。

○十月八日

戦場の兒と共に観る今宵かな。

○十月十六日 泰淳去年應召の日

思ひ出の今日秋雨に肌寒き。

去年に似て今日秋雨に風そひて。

去年に似て秋雨風に窓暗く。

十月八日の作は、八日月を見ながら、戦地にいる泰淳の無事を案じたもの。

十月十六日の三句は、一年前の泰淳応召の日と同じように冷たい秋雨が降るなか、出征時の様子を思い出し、そして、かの地の息子に思いを馳せた作。

最後は昭和十四年のもの一句。

○一月八日 新舞子にて

戦場もかくあるらしく吹雪する。

これは、当時、愛知県知多郡旭村新舞子の東京帝国大学水産臨海実験所附属水族館に勤務し研究生生活を送っていた長男大島泰雄夫婦のところへ、正月に出掛け、新舞子から、冬の戦地生活を送る泰淳を案じたものである。

注

(1) 「父子の情」(昭和二十七年七月「小説公園」)

(2) 「坊さんらしい人——父を語る——」(掲載誌は未詳)

『武田泰淳全集 第十二卷』昭和四十七年一月筑摩書房

に収録)

(3) 『竹内好全集 第十五卷』(一九八一年十月 筑摩書房)に収録。

(4) 泰淳は父の菊づくりについて、「菊の世話をしていれば機嫌がよかった。その菊も新種をほしがらず、見せびらかしもせず、育てるあいだの楽しみだった。」(「坊さんらしい人——父を語る——」前掲(2))と述べている。その他、「いななか者」と「世界人」(昭和三十五年一月四日「産経新聞」)、「わが心の風土——寺の子として——」(昭和四十二年十二月十七日「読売新聞」)、「僧侶の父——ほんとうの教育者はと問われて——」(昭和四十五年十二月二十九日「朝日新聞」)の中でも語っている。

(5) 前掲(3) なお、「飯塚」とは飯塚朗。

(6) 「中国文学研究会の武田さん」(昭和四十七年二月『武田泰淳全集 第七卷』付録「月報9」)

当時、泰淳や井上紅梅と『支那邊疆視察記』を共訳中だった飯塚朗は、「私が二日ばかり横浜の叔母の家へ帰って、最後の仕上げに再び目黒の長泉院へもどったところ、静かなはずの境内の空気がかざわついている。はてなと思った眼にとびこんだのは「祝出征・

武田泰淳君」の幟のぼりであった。」と述べている。「武田を透して考える事ども」(昭和四十七年一月『武田泰淳全集 第十二巻』付録「月報8」)

なお、竹内好は、本郷にあった漢籍専門書店文求堂の主人田中慶太郎が、泰淳に出征祝いの幟を贈ったことを「文求堂子、武田に旗をおくる。」と記している。

(昭和十二年十月十四日(木)の日記)

また、松枝茂夫も、「田中さんは会に対して非常に好意的になり、武田の評判は最もよかった。文求堂のすぐ近くの紙屋の二階に会の事務所を斡旋してくれたり、同人の出征を祝って国旗や酒を贈ってくれたりした。」と回想している。(「二、三十年も昔のこと」昭和四十六年十月『武田泰淳全集 第一巻』付録「月報5」)

〔付記〕

本稿をなすにあたり、大島淑氏のご高配により、大島泰信の貴重な俳句手帳を閲覧させていただき、それを論文化することの許可をいただき、また、多くのご教示を賜った。ここに深く感謝申し上げます。

なお、本稿に関する一切の責任は、筆者長田真紀に帰するものである。